

りすシステム (Living Support Service・System) 千代田区、杉山歩代表理事) は、僧侶である松島如戒氏が、1993年に設立し、生前サポート、任意後見、死後サポートを行う老舗の団体として知られている。

『血縁家族』から『契約家族』へ」というキーワードを掲げ、家族の役割を契約によって引き受けてきた。

26年前の創設時には、契約者は独身者、子ども



黒澤さん

のいない夫婦が中心だったが、最近では、障書を持つ子の親、8050問をを抱える親などが増えており、生前サポートの重要性は一層増してきている。

「契約者で、重度の障書を持つ子どもの80代の

たかないわと私たちには話すのです」(りすシステム行政書士・黒澤史津乃さん)。本人の意向を深く考えず、目の前にあるサービスに安易に納得してしまつことに黒澤さん

は危惧を感じるとい

本人の意思を生前から

任意後見の老舗・りすシステム

お母さんが大腿骨骨折で入院し、退院後に「お風呂に入りた」とケアマ

りすシステムでは「生前契約アドバイザー」という法律、医療、介護保

は契約者ごとに専属ではなく、誰もが対応できるようになっている。「契約者データベースを作つて情報を共有しています。契約者と話をしたら、ささいなことでも書き込み、何かあったときにデータベースを見れば、

自分で膨大な資料を集めて気に入った老人ホームを見つけ入居した。後に認知症になり、胃ろうが必要な状態になった。「Aさんの希望は胃ろうはつけないでほしいという

した。残念ながら胃ろうをつける前に亡くなられたのですが、Aさんの人となりや意向を細かくみ取っていたからこそ、胃ろうをすると決められたのだと思います」

黒澤さんたちは、サービス担当者会議にも参加し、契約者の意思を積極的に伝える。「介護や医療の側の人たちは、困り事だけに目を向けがちです。介護保険で利用者第一を貫くには役割分担が必要で、介護や医療の専門職の人たちに私たちの活動のこともっと知ってほしいと思います」。

任意後見の必要性を今後も伝えていきたいと黒澤さんは話す。